

台湾花蓮市に残る日本統治期の建築物に関する日台共同フィールド調査の結果 と参加した学生の意識の変化

準会員○渡邊葉子*1 正会員 辻原万規彦*2

13. 教育-3. 教育方法 建築歴史・意匠

台日連合田野調査, 東華大学, 観光マップ, アンケート調査, グループ活動

1. はじめに

台湾西部地方に比べて台湾東部地方を対象とした歴史的な視点からの研究は立ち後れている¹⁾。日本国内でも建築の分野では、移民村に関する研究²⁾はあるものの、花蓮市など都市域を対象とした調査は少ない。一方、地方公立大学の学生が国際ワークショップに参加した経験を考察した例³⁾はあるが、大規模な大学とは違って、小規模な大学で国際共同調査に参加する際のノウハウの共有や蓄積は未だ不十分である。

本稿の目的は、以下の2点である。一つは、台湾東部の花蓮市に残る日本統治期の建築物を可能な限り網羅的に記録すること。いま一つは、台湾の東華大学との合同調査を実施する過程での参加学生の意識の変化を把握すること、である。後者の作業を通じて、今後、国際共同調査に参加する際の留意点も示したい。

2. 花蓮市の概要^{4), 5)}

花蓮市は、2014年現在、人口約10万人の台湾東部で最大の都市であるが、日本統治期以前の花蓮港街は現在の旧市街とは異なる場所にあった。当時非常に小さな集落であった新港街に、日本統治初期に台東庁花蓮港出張所が移転した後、発展した地区が現在の旧市街である。明治44(1911)年に、現在の花蓮鐵道文化園區(図2参照)付近に花蓮港駅が竣工し、さらなる発展を遂げた。なお、この駅は戦後郊外に移転した。

3. 日台共同フィールド調査の概要と結果

フィールド調査(台湾での呼称は「台日連合田野調査」, 図1)の参加者は、国立東華大学 人文社会科学学院 台湾文化学系の3年生7名と4年生5名(人文地理資訊系統研究室)、熊本県立大学 環境共生学部 居住環境学科の4年生6人の合計18名であった。台湾側4名と日本側2名の計6名で3つの混成グループを編成した。チューターは東華大学2名(郭俊麟 助理教授, 大学院生)と熊本県立大学1名であった。

期間の前半は、花蓮市の旧市街地を対象として、日本統治期から残っていると考えられる建築物に関する調査を行った。グループごとにできる限り全ての建築物を観察して、対象である可能性がある建築物をデジタルカメラで撮影し、位置を記録した。対象であると考えられる建築物の判断方法は、各グループに任せられていた。そのため、筆者らが、グループ活動とは別に、対象地区のほぼ全てを回り、補足調査を行った。

その際、郭助理教授から提供された空中写真⁶⁾とGoogle Map(2014年8月閲覧)を参考にして事前に作成した白地図、同じく郭助理教授から提供された戦前期の花蓮市街を戦後に復元して描かれた『花蓮港市街図』⁷⁾、現在の空中写真などを各グループに配付した。

フィールド調査の結果、日本統治期から残っていると考えられた建築物の分布を図2に示す。

さらに、期間の後半には、前半の調査を基に各グループでテーマを設定して観光マップを作成し、発表会を開催した。観光マップの作成は、地理分野を専攻する東華大学の学生と共同で、建築史分野の調査を行うことを考えて設定した。成果物を作成する目標があることで、グループでの活動が活発になることも考えた。

4. 調査に参加した日本側の学生へのアンケート調査

表1に示すような項目で、Wordファイルに直接書き込む形式のアンケートを、5名の日本側の学生に対して調査の参加前後に配付して回答を依頼した。回答を一部要約もしくは抜粋した結果を表2と表3に示す。

(1) フィールド調査に臨んだ姿勢

前Q5(参加前のアンケートのQ5の意。以下同じ。参加後は「後」と表記)と前Q6より、他国の学生との共同活動や異文化に触れることへの期待があり、好奇心を持っていることが窺えた。一方で、言葉の問題や話し合いを進めることができるか、も含めてコミュニケーションへの不安が感じられた。また、環境が変化す

ることや体調面の不安も感じていた。

(2) 台湾側の学生との意思疎通

参加前には、台湾側の学生とは一定程度意思疎通が図れると考えており（前Q2）、参加後も評価は大きく変わらなかった（後Q7）。

過去の体験（前Q1）からか、参加前には、台湾側との意思疎通の際に言葉の問題、すなわち手段に注目していたが、その他の準備についてはあまり考えていなかった（前Q3）。現地で、話し合いの前に話す内容を準備することの有用性に気付いた学生もいたが、臨機応変の対応には難しい面も見られた（後Q8）。宿舎が同じであったため、夜間の振り返りによって、日本側の学生間で準備の有用性が共有できた可能性もある。さらに、相手側の言葉を覚えるなどのように、現地入り以前の準備の大切さを指摘した学生もいた（後Q8）。

また、後Q8からは、日本語でも良いのでもっと積極的に話す、すなわち積極的な意思表示が大切だと考えたことも窺える。さらに、互いの理解の共有には、英語よりも漢字や図、絵などのように互いに理解がしやすい手段が有効であったことも読み取れる。

どのような手段を用い、どのような準備をすると意思疎通を図りやすいかについて、参加者間での事前の情報共有が重要であった可能性が指摘できる。

(3) グループ活動の進め方

前Q4では、参加前にはグループ活動の過程よりも、意思疎通の手段が注目され、具体的な話し合いのイメージが書かれていなかった。そのためか、グループ活

動では、受け身な学生が多かった（後Q1、後Q2）。このような場合であっても、日本人同士での様々な確認作業によって理解を深めることができた（後Q6）。

グループでの活動のプロセスを具体的にイメージできる準備が重要であった可能性が指摘できる。

(4) 日台混成グループ活動での意思疎通

台湾側との意思疎通では漢字が有用であった（後Q5）。一方、グループ活動では英語で伝えられた内容が理解しやすかった（後Q3）。個人での意思疎通とグループ内での意思疎通には差があったことが窺える。後Q4では、日本側では細かなところまで話し合えたと指摘しており、日本側と台湾側のそれぞれで情報を共有し合いつつ、日本側と台湾側で互いにやりとりの手段を工夫することが有用であると考えられる。

手探りの状態で話し合いを進めるのではなく、どのような手段が意思疎通を図りやすいかを互いに要所で確認することが重要であった可能性が指摘できる。

5. まとめ

本稿では、①台湾東部の花蓮市に残る日本統治期の建築物の網羅的な記録、②台湾の大学との合同調査を実施する過程での参加学生の意識、について報告した。

謝辞 国立東華大学の郭俊麟助理教授や学生の皆さん、太魯閣客運、花蓮鉄道文化館はじめ調査にご協力下さった住民の方々に深く御礼申し上げます。なお、台湾への渡航にあたっては、熊本県立大学後援会の助成を受けた。

注・参考文献

- 『20 年來臺灣區域史的研究回顧學術研討會會議資料』（中央研究院臺灣史研究所、林本源中華文化教育基金會、2013.9）による。同様の指摘は、『知られざる東台湾 湾生が綴るもう一つの台湾史』（山口政治、展転社、2007.4）でもなされている。



図1 フィールド調査(台日連合同野調査)の経過



圖2 花蓮市旧市街における日本統治期から残ると考えられる建築物

- 菊地成朋, 箕浦永子, 天満頼子, 牛島朗ほか: 台湾東部の旧日本人移民村に関する調査研究 その1~3, 日本建築学会大会(近畿) 学術講演会梗概集, E-2, pp.134~138, 2014.9
- 加藤浩司, 辻原万規彦, 江藤紅音: 様々な背景を持つ学生が日韓デザインワークショップで意志決定までに到った過程, 日本建築学会技術報告集, 第43号, pp.1121~1126, 2013.10
- 張家菁: 一個城市的誕生 花蓮市街的形成與發展, 花蓮縣文化中心, 1996
- 呉翎君編: 續修花蓮縣志 歴史篇, 花蓮縣政府, 2006.6
- 米国立公文書館が所蔵している原本を台湾の中央研究院が複製した米軍の撮影による空中写真が郭助理教授より提供された。B04153-074, 昭和20(1945)年7月11日撮影。
- 斎藤昭二作成, 1997.8

表1 アンケートの質問項目(質問内容を要約)

フィールド調査参加前
Q1: 外国人との交流の経験/Q2: 参加者との意思疎通度合いの予測/Q3: 参加者との意思疎通の際の工夫/Q4: グループでの話し合い方法の予測/Q5: フィールド調査への期待/Q6: フィールド調査への不安
フィールド調査参加後
Q1: グループ活動の進め方/Q2: グループ活動での役割/Q3: グループ活動での言語と意思疎通手段, 理解しやすい順番/Q4: 日本側と台湾側との意思疎通度合いの違い/Q5: 台湾側と他の外国人との意思疎通度合いの違い/Q6: 個人とグループとの意思疎通度合いの違い/Q7: 参加者との意思疎通度合い/Q8: 参加者との意思疎通の改善策/Q9: 全体での改善点(回答省略)

表2 フィールド調査参加前のアンケートの回答(一部抜粋, 要約)

	学生1	学生2	学生3	学生4	学生5
Q1	ニュージーランド。片言の英語や日本語, ジェスチャー, 電子辞書。	中国人に道を訊かれた。片言の英語で手で方向を指して道を教えた。	イギリスで現地の大学生と。ゆっくり言ってもらい。分かりやすい言葉に言い直し。身振り手振り。	イギリスでホストファミリーと。電子辞書, 身振り手振り, 写真, 絵, 中国, 韓国, アジア圏の人。簡単な英語とジェスチャーで。	ある。シンガポールの人。簡単な英語と身振り手振り。
Q2	中国語が全く分からない。日本語を話せる学生がいるらしいのである程度意思疎通ができる。互いに全く分からないということはない。	自分が伝えたいことの半分は伝わる。	日本語のように英語で伝えることはできないが, 賛成や違うと思う意見がある場合は伝える。簡単な質問はできるので, 分からないことは質問する。	英語も得意じゃないし中国語もできないから, 大変だと思うが, たいたいできる。	お互いが伝えたいことの3分の2程度。
Q3	まずは, コミュニケーションを図る。アイズブレイクなどで互いに言いたいことが分かるようになるのでは, 簡単な英語や漢字で意思疎通が図れる。	簡単な英語で伝える。紙に漢字や英語を書いて伝える。身振り手振りして伝える。	英語と漢字を使う。相違などをして分かっている事を知らせる。研究内容だけでなく, 相手自身の事も知って話を広げることができたらしい。	漢字がわかると思うので, 書いてある程度の意思疎通はできる。聞きたいことを事前に中国語や英語で訳しておく。写真や地図などを見せる。	筆談(共通の漢字の意味で)。身振り手振り。意思疎通を図ろうという気持ちを態度で示す。
Q4	言葉だけでは難しいので絵や図を書いたり, 写真を見せたりして話し合いを進める。日本から持って行く地図のイメージを見せながら話し合う。	予め聞きたいことや伝えたいことを英語に直しておき, スムーズに話し合えるように。こちらの調査内容と台湾の人の調査内容をお互い把握し, 良い調査方法を決める。	誰かが仕切っていくというよりは, みんなで進めていく形になる。英語と漢字を使ってのコミュニケーション。どうやって, 意見をまとめていくかが大変だと思うので, 工夫が必要。	グループの人と仲良くなれるように話し合いの前になにか話せればよい。どのような地図を作るかに関しては, 参考を持って行く地図に, 特徴などを事前に英語で書いて, 話し合う。	筆談したり, できるだけ図で示したりしながら。
Q5	海外の学生と一緒に何かを作ることがなかったので台湾の学生と一緒に作業をしてつくる地図への期待を抱いている。	少しは外国人とコミュニケーションが取れるようになるのでは。異文化に触れることで刺激を受け, 今後に生かせるのでは。	最初と最後ではコミュニケーションの取り方がうまくなっているといえ, 英語を含め, 簡単な中国語も理解できた。	台湾の人と一緒にフィールドワークをすることで, 自分たちだけでより確実に日本統治時代の建物をみつけれられる。台湾の人と仲良くなれる。	自分の国とは異なる文化に触れること。
Q6	特になし。	英語や台湾語が話せないで, ちゃんとコミュニケーションが取れるか不安。	うまく話し合えるか, 話し合いがまとまるか, 言葉が通じないで, 伝えるのにかかる時間が分からない。お互いの意見が矛盾なく理解できるか不安。	中国語がわからない。現地の暮らさずバテないか。	台湾の人と意思の疎通がうまくできるかわからない。いつもと違う環境なので体調が心配。

表3 フィールド調査参加後のアンケートの回答(一部抜粋, 要約)

	学生1	学生2	学生3	学生4	学生5
Q1	他の日本人学生	台湾学生①: 日本語と英語が話せるため, 両方の学生の意見を通訳。台湾学生②: 意見を積極的に出し, 話し合いを進めた。	台湾学生①が両方の学生の意見をつなげ, 仕切った。台湾学生②が台湾語で数多く意見を言った。	台湾学生①, 台湾学生②	台湾学生①が主に仕切っていて, 台湾学生②が英語でわかりやすく通訳してくれた。
Q2	他の日本人学生の補佐的な役割	他の日本人学生と考え, それを英語や紙に書いて伝えた。最終発表では日本語で発表。	台湾の学生に世話になりっぱなし。作業は台湾の学生が主にやった。相手の言いたいことを理解することの方が多かった。	話を聞く。話し合ったことを台湾の学生に伝える。	グループの一員として, 自分のしたいこと, 台湾の学生にしてほしいことを伝えていた。
Q3	[前半] ①ノートに漢字や英語で書いて見せる②簡単な英語③簡単な日本語 [後半] ①ノートに漢字や英語で書いて見せる②簡単な日本語③簡単な英語	①英語 ②紙に英語や漢字, 図を書く ③身振り手振り	台湾学生①が台湾語を英語に言いかえた。他の学生も英語や日本語で伝えてくれ, 理解できた。分からない漢字もあった。同じ意味の他の言葉に言いかえた。	①英語②ノートに書く③翻訳ツール(アプリ) (日本語と中国語は「大丈夫」と「謝謝」くらい)	①Lineの翻訳ツール(中国語・日本語) ②英語③筆談(英語・漢字)
Q4	違いあり。言葉が違ふことで, 分かりやすく簡潔に伝えないと伝わらなかった。	日本人同士だと, 伝えたいことはほとんど伝わるが, 台湾の学生とは, 伝えたいことを上手く英語にできない時があり, 半分くらいしか伝わらず, 難しかった。	日本人同士では細かい事まで伝えたい事が伝わるが, 日本語ではない場合は, すべては伝わらなかった。相手の言いたいことの雰囲気等は分かる部分もあった。	違いあり。言語が違うので, 自分の考えが同じように台湾の学生に伝わっているかわからないと感じた。	少しあった。日本の学生には詳しい意見を伝えることができたが, 台湾の学生には伝わらないことがあったり, 大まかな内容しか伝えられなかった。
Q5	違いあり。互いの母国語ではない英語での意思疎通だったので互いに伝わりにくかった。漢字を書いたら意思疎通が図れる点はよかった。	外国の方に道を聞かれるなど, ちょっぴりした交流をしたことはあるが, 台湾の人と意思疎通を図る時は違いはないと思う。	違いあり。イギリスの大学生の時は訛りもひどく理解が難しかった。台湾の学生が思った以上に日本語で話してくれ, 漢字を使ったため意思疎通がしやすくなり, 聞きやすい英語で分かりやすかった。	台湾の学生には, 漢字で書いたらわかることがあったので, 英語のみを使うよりも意思疎通ができた。	はじめはあまり違いを感じなかったが, 台湾の学生とは一緒に過ごす時間が長かったので毎日少しずつ伝わりやすくなった。他の国の人でも同じかもしれない。
Q6	違いあり。1対1だと相手に本当に伝わっているかわかりにくく, 確認するので分かるがグループだとみんなに本当に伝わっているのかわからない。	個人対個人で意思疎通を図る場合は, 相手は1人なのでなんとかなえることができるが, グループとなると, グループ全員に自分の意見を伝えることは難しかった。	グループでは, 日本の学生だけで後から確認でき, 相手の言いたいことと理解した内容の矛盾が少なく済んだ。個人の場では確認ができないために, 分からない時は何回も聞きなおしてしまった。	グループでは, こちらの意見を理解した台湾の学生が, わかっていない学生に中国語で伝えたので, 意見が伝わりやすかった。個人では, わからなくてもとりあえず話をしていくことが多かった。	違いあり。グループでは, 一人でも意見を理解する人がいれば, 他の人も通訳してくれたので伝わりやすかったが, 個人の場合は相手に一回で理解できないと, 伝えるまでに時間がかかった。
Q7	ある程度できた。[できたこと] 簡単な英語に直して話す道筋を考えたことで伝わった。[できなかったこと] 台湾の学生は既知の建物だけを見ようとし, 全部見たいと伝えるのが難しかった。予め道筋を立てなかったためうまく伝わらなかった。	だいたいは意思疎通を図れた。英語や図を書いて自分の意見を伝えられ, 台湾の学生の意見も理解でき地図を作れたから。ご飯を食べるときも, 色々英語で話すことができた, 意思疎通を図れた。	個人のことや学校のことなどを話せたため個人を助けた。研究については英語や漢字を使っても言いたい事が伝えられない事もあり, 相手がなんとなく理解してくれて「こういうことだね?」と逆に伝えてくれることもあった。	予め用意した英文と例などを交えた話し合いは伝わった。調査の際は, 必ず足を止めて日本のモノか聞いたことからも伝わった。台湾の学生側の意見に, 地図の完成した様子や, かかる時間が想像できないということも, 英語で伝えきれずに意思疎通が難しかった。	6割程度は伝わった。[できたこと] 地図作成時既知の英単語の範囲で説明ができたので伝わった。雑談時, 表情などで伝わった。[できなかったこと] 片方がしたい時, 何度伝えても両方と解釈された。考え方の違い?言葉の使い方が?調査方法では意見が伝わらなかった。台湾の学生の最終目的が地図を作ることだけだったから。
Q8	後半になって予め英語に直して道筋を立てて話すことで伝わりやすくなった。最初は会話がかたどどなかったが, 打ち解けていくと話せるようになったので工夫すればよかった。	英語で話す時, 間違っても気にせず簡単な英語で話すよう努めるべきだった。紙に英語ではなく漢字を書いて伝えたらもっと伝わったのかも。	もっと挨拶程度の台湾語も覚えておけば。相手の学生が日本語や英語が上手だったために頼る部分があったため, 英語ももっと復習して行けばよかった。	早口の学生には, ゆっくり話してもらおうように頼ればよかった。電子辞書があれば単語の意味などがすぐにわかったのではないかなと思った。	筆談するときにもっと絵や図をかいたら伝わりやすかった。あまり気にせず日本語を多く話しても良かった。

*1: 熊本県立大学環境共生学部

*2: 熊本県立大学環境共生学部 准教授・博士(工学)

Prefectural University of Kumamoto

Assoc. Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.